

特集 慶長5年、 那須の緊張

はじめに

慶 長5年(1600)の関ヶ原合戦は、徳川家康にとつて覇権確立への確かな契機となり、戦国乱世を終息させて太平の世を創出したという意義を有しており、まさに天下分け目の戦いでした。同合戦を同年9月15日の美濃国関ヶ原(岐阜県関ヶ原町)での大合戦のみと捉えず、会津攻めからの一連の戦いと考えれば、

那須衆(那須氏や同氏の目下の同盟者も同合戦において一定の役割を果たしていたと言えます。以下、同合戦における那須衆の動向、那須の緊張について記します。

1 豊臣政権・徳川氏と那須衆

文 禄期(1592~1596)の慶長初期の頃、那須衆は、当主やその代理人を在京させて、豊臣政権に出仕させていました。また、彼らは、

天正18年(1590)の小田原攻め以降は、同政権に従属しながら、関東入りした徳川家康の旗本にもなっていたようです。

豊臣秀吉は、慶長3年(1598)8月に死去し、その後の主導権争いを制したのは、家康(豊臣政権の五大老の一人)でした。同年正月、秀吉によつて転封となり、若松城(福島県会津若松市)を居城としていた上杉景勝(120万石、五大老の一人)は、領内諸城の修築を進めるなど、軍事力強化に余念がなく、大坂にいた家康は、そうした情報を入手していました。家康に会津方面の情勢について報告した者の中には、伊王野城主伊王野資信(那須衆)も入っており、慶長5年5月3日、資信は、家康から伊王野方面の守備を命ぜられ、まもなく自らも出馬する旨を通知されています。

上杉景勝は徳川家康からの呼び出しに応じず、これは慶長5年6月の

家康による会津攻め決定に直結するところとなります。

慶長5年正月時点で在京していた黒羽城主大関資増(那須衆)は、その後大坂入りして、他の那須衆(那須資景・大田原晴清・福原資保ら)と共に大坂城において徳川氏から上杉軍への防備態勢をとるべく帰国せよとの命令を受けました。

2 会津攻めと小山評定

慶 長5年9月15日の関ヶ原合戦に至る軍事的展開は、同年6・7月の会津攻めから開始となります。

会津攻めには、徳川譜代の武將の他に主(主)に畿内近国から東海道筋に領地を持つ外様の武將(豊臣系諸將)も従軍していました。家康は6月16日、総大将として全軍を率いて大坂城を發ち、景勝を討つべく会津に向けて進軍します。家康は7月2日江戸に入り、豊臣系諸將も江戸に集結。そして奥羽・北陸の大名にも会津攻めを指令した上で、家康ら本隊は宇都宮城を前線拠点として、白河口から進撃することを予定していました。

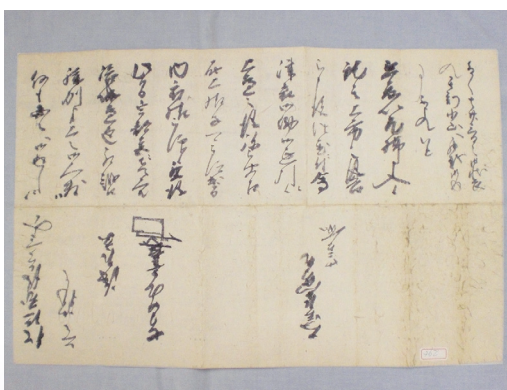
7月13日には、徳川譜代の榊原康政(上野国館林10万石)が徳川軍先鋒と

して出陣し、同15日大田原に着陣しており、ここで那須衆はいち早く彼らに属しています。7月22日には、宇都宮城に徳川秀忠(家康三男)が着陣。同日小山に家康が着陣となります。

大関資増・大田原晴清(大田原城主)・伊王野資信は7月22日、石橋(下野市)まで進んで秀忠に拝謁し、那須資景(福原城主)・芦野政泰(芦野城主)・福原資保(御古屋敷館主)は同日、白沢(宇都宮市)で秀忠に拝謁しました。さらに大関・大田原・伊王野諸氏は24日、小山に家康を訪ね拝謁しており、上杉軍に対する防備を改めて命令され、刀や金子を与えられて、各自の城に帰ります(那須資景も、家康の許を訪れたようです)。



関ヶ原古戦場 (徳川家康最後の陣地)
(岐阜県大垣市)



小山評定の真実を物語る浅野幸長書状

家康は、7月21日の江戸出発前後に上方での石田三成らの決起情報を得ており、早くも会津攻めの中止と西上、すなわち石田氏ら(西軍)との決戦の意志を固め、23日にはそうした態度を表明しながら、それらの方策について25日に小山で諸将と合意を形成した上で、最終的に決定しています。

会津方面に対する防備のため、徳川秀忠と結城秀康(家康二男、下総国結城10万石)が宇都宮城本丸に配され、徳川諸将や下野諸大名・奥羽諸大名によって上杉軍を包囲し、その南下を阻止することが図られました。

浅野長政(五奉行の一人)の子、浅野幸長は、徳川方による改めての会津攻めの可能性を示唆することで黒羽城の防備態勢を強化させようという意図し、大関資増宛ての7月29日付書状により、会津攻めが「御延引」(延期)になったと通知しています。

3 大田原城と黒羽城の防備態勢

奥

州との境目に位置する重要な要害としては、芦野城・伊王野城・大田原城・黒羽城・烏山城・城主成田泰喬)がありました。その内、前二者は对上杉の前哨、後三者は主たる防御拠点と位置づけられています。



黒羽城跡(本丸と南側の三の丸の間の堀跡)

当初徳川氏は、6月ないし7月中旬頃までの段階では、会津攻めの前線拠点を宇都宮城から順次大田原・黒羽両城に移し、前者に家康、後者に秀忠が入城することを想定していたことが窺えます。

奥州境の情勢について徳川秀忠に報告していた大田原晴清は、6月22日付秀忠書状を受けて、奥州方面への人々の通行を禁止すべきことを要請されています。また、同月には、大田原城を修築するため石川重次(徳川



黒羽城跡

譜代の家臣)・内藤忠清(同)が奉行として遣わされ、援軍として皆川広照(下野国皆川1万3千石)・皆川隆庸(広照の子)・服部半蔵正就(5千石伊賀同心の頭)が派遣されました。7月末には、徳川氏の命により、那須資景・福原資保・伊王野資友(資信の子)・岡本義保・大田原増清(晴清の弟)ら那須衆が同城の守備に加わっています。さらに、同城に対しては、徳川氏から鉄砲10挺が預けられています。



大田原城跡

用語解説

- 出仕…政権所在地に出向いて政権に仕えること。
- 転封…権力者の命令で本拠や領地を他に移すこと。
- 徳川譜代…徳川家康直属の家臣。
- 外様…関ヶ原の戦い前後に新しく徳川氏の支配体系に組み込まれた大名のこと。
- 畿内…京都に近い国々。
- 拝謁…身分の高い方に面会すること。

黒羽城にも修築の手が加えられるところとなり、6月、榊原康政家臣伊奈主水が奉行として派遣され、防御能力が強化されました。この時、新たに四つの門が建立となり、その内の黒門は、城の大手門という性格を有する入母屋屋根の櫓門で、秀忠本陣としての格式が整えられたものと考えられます。

黒羽城への援軍としては、岡部長盛（下総国山崎1万2千石）が本丸、服部保英（下総国内3百石、伊賀同心の頭）が二の丸に配され、城主大関資増は千本義貞（那須衆）と共に三の丸に籠城。同城に対しても、徳川氏から鉄砲15挺が与えられています。

水谷勝俊（常陸国下館2万5千石）は、初め黒羽城に加勢として入城したようですが、後に大田原城の皆川広照と共に鍋掛（那須塩原市）の要害に前進配備されています。成田泰喬も、烏山城を守りつつ、鍋掛要害にも配備されていました。

4 徳川氏への忠誠表明と情報収集活動

那 須衆は、徳川氏への忠誠を表明するため、8月1日～11日頃に、自身の母・妻や一族・家臣、あるいは一族・家臣の妻・娘といったかけ

がえのない人たちを江戸城に人質として送っています。彼ら人質たちの生活については、徳川方から相應の配慮がなされていたものと考えられ、後に大関氏が幕府に提出した史料からは、彼らが翌慶長6年（1601）に国許への帰国を許されたことが判明します。

この時期、黒羽城は上杉領についての情報収集所という性格を担っており、同城には伊賀・甲賀の同心も入城していました。黒羽城からは白河方面へ密偵が派遣されており、大関資増も伊達政宗家臣鈴木重信に書状を送り、上方へ宿老の松本惣左衛門を派遣するなどして、情報収集に尽力していました。

関ヶ原合戦（9月15日）での東軍（徳川方）勝利の事実を那須衆に伝えた第一報は、大関資増宛ての9月19日付浅野長政書状で、これは9月中には資増の許に届いていたと思われます。大関氏は、このような上方方面に関する入手情報を他の那須衆や成田氏（烏山城主）らに伝達・周知化していたものと考えられます。大関氏は、情報収集に努めることで、自らが身を置いている危機的な局面を打開し、活路を見出そうとしていたのです。

5 関山合戦とその後

関ヶ原合戦に連動する形で、全国的に戦闘が起こっており、那須地域周辺においても、小規模ながら軍事衝突が起こることとなりました。9月14日から翌日にかけて、関山（福島県白河市）およびその周辺で上杉軍の一派と伊王野勢との間で合戦となり、伊王野勢は39名の犠牲を出しつつも、上杉勢を撃退したと伝えられています。上杉勢侵攻の報に接した大田原・黒羽両城では、後詰（後陣）の手配を行うも、戦闘は拡大せずに終息しました。

大関資増は9月14日までに、8月21日からの東軍先発隊による岐阜城攻略戦についての一定程度の情報（東軍有利の情報）を入手していたと考えられます。それゆえ伊王野氏は、大関氏経由で同様の情報を得た上で、最上氏（山形方面）攻めを開始した上杉氏の背後を牽制するべく、関山合戦に臨んだ可能性があると言えるでしょう。

関山合戦終息後も、上杉氏重臣直江兼続が関東方面に軍事行動を起こすとの風説もあり、結城秀康・蒲生秀行（宇都宮城主）・那須衆らは、昼夜のない防備態勢をとり続けました。那須衆はこの間、上方に使者を派

遣したり、書状を送付するなどして、徳川方と音信を通じさせていました。そうした中、慶長6年（1601）5月には、黒羽城に対して徳川方による関山ないし白河方面への改めでの軍事行動が予告されることとなりました。いまだ那須地域は、上杉軍との間で軍事的緊張状態にあったのです。

那須衆と上杉軍との対陣が続く中、一方では、慶長5年10月下旬から始まっていた上杉氏と徳川氏との和睦交渉が続いており、翌6年6月には和睦が成立します。



伊王野城跡

7月、上杉景勝は直江兼続と共に京都へ向かい、8月には伏見城で家康に拝謁し、上杉氏の米沢(山形県米沢市)への転封および30万石への減封が決定します。

そうした中、慶長6年7月、大田原・黒羽両城に入っていた援軍が退去しました。彼らの退去を待って、那須地域の軍事的緊張状態は、解消されるところとなったのです。

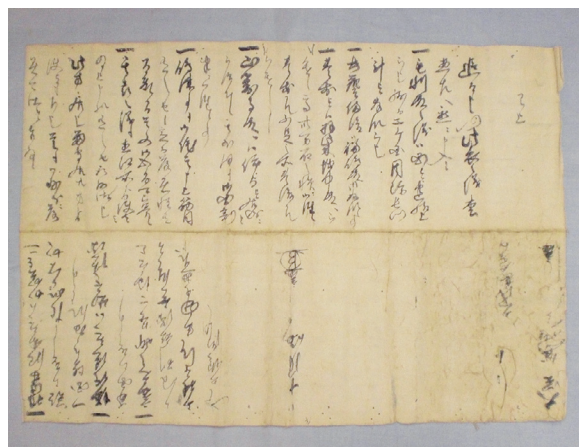
6 論功行賞

関ヶ原合戦以前と同様、大坂城は、諸将に対する戦後処理・論功行賞を逐次発表していきました。西軍に加担した諸大名からの没収総石高は、改易・減封を合わせて624万石余、豊臣蔵入地の削減分も含めると約780万石となり、全国総石高の約40パーセントに相当しています。これらは、豊臣系諸将への大幅な加増と徳川陣営の防衛体制強化に活かされることになりました。

大関氏宿老松本惣左衛門が入手した大関資増宛ての、慶長5年と考えられる10月晦日付久代景備書状には、毛利輝元・福島正則・細川忠興・山内一豊・島津義弘・前田利長・堀尾忠氏への処遇・論功行賞について

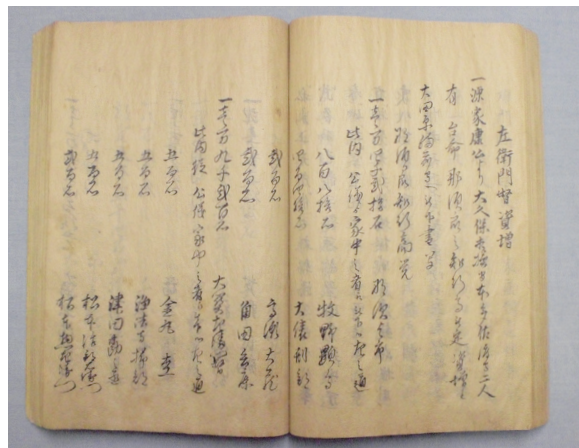
て記されています。長宗我部盛親が関ヶ原合戦後の土佐(高知県)に帰国後、慶長5年10月下旬まで東軍方に対して強硬な姿勢を堅持していたことにより、土佐はいまだ山内一豊へ与えられる状況には至っておらず、本書状からは、この時点で徳川氏が一豊に伊予(愛媛県)を与えることを検討していたことが判明します。

那須衆に対する論功行賞は、慶長5年および同7年の2度にわたって行われ、加増がなされました。この加増は、徳川家康の命により、本多正信・大久保忠隣の名前をもって行われたと考えられますが、慶長5年の給付は、上杉軍の押さえという働きをするに当たったの当座の配



諸将への処遇の一端が記される久代景備書状

当であり、同7年の給付に比して少額でした。慶長7年の給付は、那須衆からの人質差し出しも勘案した上での、有力家臣も対象とした本格的な加増となり、本多正信・大久保忠隣の連名で大田原晴清・大関資増宛てに、「那須衆知行高覚」と題された覚書が送付されています。那須衆には那須郡・芳賀郡(宇都宮領他)・陸奥国白川郡(岩城領内などで所領が給付され、那須資景は1万4千石余、大田原晴清は1万2千4百石余、大関資増は1万9千2百石、福原資保は4千4百石などとなりました(最終的な石高については、後に変化があります)。



「那須衆知行高覚」(部分)

おわりに

の時の論功行賞は、基本的に幕藩体制下での那須衆の政治的地位を決定付けることになりました。大関・大田原・那須の3家(後に2家)が大名として位置付けられたのに対し、福原・芦野・千本・伊王野・岡本・大田原(増清)・千本(資勝)の7家(後に4家)は、旗本(交代寄合)となりました。

その内の大関・大田原両氏は、関東の外様大名としては珍しく、江戸時代を通じて改易・転封を経験することがありませんでした。その要因としては、関ヶ原合戦の際の働きが評価されていたことや、この時期に徳川氏との間で密接な関係を築いていたことなどが考えられるでしょう。

用語解説

- **要害**…敵を防ぐための拠点となる、城郭などの施設。
- **国許**…生まれた土地、故郷。
- **減封**…領地の一部を削減すること。
- **改易**…領地などを没収すること。
- **加増**…領地などを増加すること。
- **論功行賞**…功績の大小を調べて、それに応じてふさわしい賞を与えること。

問 黒羽芭蕉の館 11 (54) 4151